

Today's Keyword mode2

最近、IT業界では「mode2(モードツー)」という言葉をよく耳にします。AIやIoT、RPAなどデジタル技術の進化に伴い、DX(デジタルトランスフォーメーション)が加速するなか、システム開発の流儀に切り替えが必要になり、mode2が登場しました。インテックではmode2を取り入れ、自社の商品サービス開発だけでなく、お客さま向けの基幹システム開発の改善にも取り組んでいます。今回は「mode2とは何か」と「インテックのmode2開発の取り組み」についてご紹介いたします。

mode2は、2014年にガートナー社が提唱したバイモーダルのmodeのひとつです。バイモーダルにはmode1とmode2があり、開発対象のシステム特性によって開発の流儀を選択することを示しています。

mode1の対象は、企業の基幹システムのように「堅牢性を重視」するシステムです。堅牢性が求められるのは、企業の基幹システムだけでなくLINEのようにすでに社会インフラ化しているシステムやSuicaのような決済システムです。mode1に「古いシステム」という意味はありません。

mode2の対象は、メルカリやUberのように市場リスクへの「柔軟性を重視」するシステムです。市場リスクとは、お客さまのいる市場のニーズにマッチしなければ利用されない可能性がある一方で、市場に受け入れられると売上が拡大し、ビジネスに貢献する可能性があることです。市場リスクへの対策としては、稼働するシステムを実際に利用してもらい、フィードバックを得ながら改善を繰り返していく方法があります。

インテックは、自社の商品サービスである結人・東人、F3(エフキューブ)のようなサービス開発に加え、お客さま向けの基幹システム開発でも、mode2を取り入れています。例えば基幹システムの開発現場においては、長期にわたる開発期間の中で競合他社の動向が変わることもありますし、法律が変わることもあります。したがって、お客さまはビジネス目標を達成するため継続的に新しいアイデアを出し続けます。一方、システム

開発会社は計画を正確に実行するため、計画変更には慎重になります。変更管理の手法もありますが、計画は複雑であり、微妙なバランスで成り立っているため、計画変更には心理的な障壁があるのです。結果的にこれがお客さまに我慢を強いることになっていました。

しかし、お客さまがアイデアを出し続けることを「市場リスクへの対策」ととらえると、mode2を選択することができます。mode2の開発プロセスであるアジャイル開発を採用し、計画検討の場が繰り返し定義されていると計画変更への心理的な障壁が下がります。またテストやリリース作業の自動化は、システムの機能追加や仕様変更を行う際の不安を解消します。

実は、堅牢性と柔軟性を高いレベルで満たすためには十分なりソースが必要になります。mode1で堅牢性を保つには、プロジェクトマネージャーやアーキテクトのような役割ごとのスペシャリストによる分業が向いています。mode2で柔軟性を保つには、部門や役割にとらわれないクロスファンクショナルなチームが向いています。

これらの開発者がいてはじめて、堅牢性が必要なときにはmode1、柔軟性が必要なときにはmode2、というようにmodeを選択することが可能になります。これを踏まえて、インテックは組織としてバイモーダル両面の能力を備え、より幅広いお客さまのビジネスに貢献していきたいと考えています。

図1：mode1とmode2の開発対象と手段

		mode1	mode2
開発対象	例	LINE Suica	メルカリ Uber
	システム特性	基幹システム 社会インフラ	「市場リスク」がある
手段		堅牢性重視 ウォーターフォール スペシャリストによる分業	柔軟性重視 アジャイル/スクラム クロスファンクショナルなチーム

図2：mode1とmode2の関係

